

教師論の系譜

藤田 博子

大阪芸術大学 短期大学部

はじめに

平成10年12月14日に改訂・公示された『幼稚園教育要領』第3章1. 一般的な留意事項、(5)に「幼児の行う活動は、個人、グループ、学級全体などで多様に展開されるものであるが、いずれの場合にも、幼稚園全体の教師による協力体制をつくりながら、一人一人の幼児が興味や欲求を十分に満足させるよう適切な援助を行うようにすること。(6)に「幼児の主体的な活動を促すためには、教師は多様なかわりをもつことが重要であることを踏まえ、教師は、理解者、共同作者など様々な役割を果たし、幼児の発達に必要な豊かな体験が得られるよう、活動の場面に応じて、適切な指導を行うようにすること。」と明示され、教師のかかわりや、教師の役割がとりわけ強調されている。幼児教育における教師の望ましい在り方を考察するうえで、教師論の系譜をだどてみたい。

I. 古代ギリシアの教師論

古代ギリシアにおける代表的な哲学者であるソクラテス(Sokrates, 469?-399B.C.)は、教育を「^{maieutiké}助産術」といった。彼のいう「^{maieutiké}助産術」とは、出産にあたって、その助力をする助産婦の術のように、教師は、自分では真理を産みはしないが、若い人々を助けてそれを産ませる術が教育であるというのである。

「教育」education が、引き出すeducere に語源をもつのは、ソクラテスがいうように、助産婦がひとりでに産まれ出ようとする赤子を引き出し、産み出させる手助けをするように、ひとりでに生い立とうとする幼いものを援助する営みであるゆえである。それゆえ、保育者とは、幼児の自ずからなるその生い立ちに、僅かに手を貸し、援助する存在なのである。

さらには、人間形成(paideia)と遊戯(paidia)が親縁関係にあった古代ギリシアにおいては、幼時期の人間形成は、遊戯に没頭することによって果たされたのであった。それゆえ、この時代を代表する哲学者プラトン(Platon, 427-374B.C.)は、幼児の保育にたずさわる者は、遊びに没頭する幼子の姿を細かく観察することによって、それぞれの幼子の個性を発見し、それに依拠して、個々の幼子の教育のあり方を規定すべきである。と提唱している。保育者は、幼児の観察者であり、その観察による理解にもとづいての援助者でなければならないのである。

アリストテレス(Aristoteles, 384-322B.C.)は、幼児期の教育における、「環境の浄化」というものを火急の問題として提唱しているが、とりわけ、人的環境としての養育にたずさわる者の浄化であり、保育者論に通ずるものがある。

II. 古代ローマの教師論

安定した社会と家庭を定着させた古代ローマにおいては、立派な父親と卓越した母親を生み出し、家庭教育のゆるぎない基盤が確立されたのであった。この時代、幼い子どもの教育の主要な場所は家庭であり、保育者は母親であった。キケロ(Marcus Tullius Cicero 106-43B.C.)が「母親の膝下の教育(educari in gremio matris)」とよぶように、母親は幼子の健全な道徳的・宗教的感情を養成し、正しい人生観と生活態度を築くことに努めた。幼子が十分に母親から愛情をそそがれ、それによって、情緒の安定した円満な性格が形成されたのである。保育こそは、母親の重要な任務とされたのである。それゆえ、母親は保育の専門家として「敬愛すべき女性」と呼ばれ深く敬意を表されたのであった。教育の本質を人間天賦の素質の完成にあるとしたキケロは、幼い子どもの魂の接し方について、幼い魂の発達についての洞察と、それに基づく信頼を持つことを絶対の条件としたのであった。

幼い子どもは、無限の可能性を秘めているという考えに立つクインティリアヌス(Marcus Fabius Quintilianus, 35-97)は、子どもは生まれるとすぐに性格が形成されはじめるのであるから、育児は決して使用人に委ねずに、母親がその任にあたなければならない。3歳くらいまでに子どもが受ける影響力は、純白の羊毛が最初の染色を受けるのに似て、決定的なものである。この時期の養育者は、賢明で、正しい言葉が使えなければならず、その意味で、人格、見識ともにすぐれた両親、あるいは、保育者の存在が強要された。

III. ルネッサンス期の教師論

スペインの偉大な人文主義者ヴィーベス(Juan Luis Vives, 1492-1540)は、ヘンリ四世(Henry IV, 在位 1509-47)の王女メアリの教育の傍ら『キリスト教徒女性の教育論 De institutione feminae christianae, 1523』、『子どもの勉学指針 De ratione studii puerilis, 1523』を著し、イギリスの教育に大きな革新を迫ったのであるが、ヴィーベスの説く教育の目的は、「人間のあるべき姿へと回復すること humanitati reducere」であり、「教育の最初の役割は母親が担う。母親は最高の宝として子どもたちのためにどのような面倒も苦勞も惜しんではない。しかし、子どもが最高の宝であることは、決して甘やかすことを意味しない。母親の愛には厳しい規律が要求される。教育の適時を見極め、4歳から7歳が来ると、精神の開発(animum cultus)に関わるものを学ばせはじめる。と述べ、特に

「保育者は祖国の国語の宝庫の番人であれ」と、母国語教育を正しく行うことを保育者の重要な任務としている。

◇エラスムス(Desiderius Erasmus, 1469?-1536)の教師論によると、教師を務める人間は、知的・道徳的に陶冶された人間でなければならない。また、体罰や脅かしなどの恐怖を用いて幼少期の子どもを教育することは否定されるべきことであって、優しい扱いによって子どもを魅了して引きつける教師であるべきである。父親の情愛を持って子どもに接するべきであり、自ずと生じる教師への敬意によって子どもを引きつけるべきである。

IV. 近代以降の教師論

◇ルソー(Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778)

「私の教育の精神は、子どもに沢山のことを教えることではなく、正確で明瞭な観念の他には、何一つ彼の頭脳に入り込ませないことである。ということをつつまでも忘れないでいただきたい。たとえ彼が何一つ知らなくても、私はかまわない。ただ彼が間違ったことを覚えるようなことさえなければそれでいい。」と、消極的教育論を提唱し、

「教育は、生命とともに始まるのだから、生まれたとき、子どもはすでに弟子なのだ。自然の弟子なのだ。教師はただ、自然という首席の先生のもとで研究し、この先生の仕事がじゃまされないようにするだけだ。」と教師論を展開する。

◇ペスタロッチー(Johan H. Pestalozzi, 1746-1827)の教育の原点は居間の教育である。そこでの教師は父親であり母親である。父親のかたわらに母親がいて、母親の胸には幼子が抱かれ、暖かな暖炉を囲んで一家は優しさにみちた時を過ごす。そうした家庭が教育の出発点であり、母親による暖かな被抱感にやすらって「愛」「信頼」「感謝」の感情を子どもたちは自らのなかに育てていくのである。このように「居間での教育」を提唱したペスタロッチーは、1781年に教育小説『リーンハルトとゲルトルート』を著し、理想的な教師像を示したのであった。

◇フレーベル(Friedrich Fröbel, 1782-1852)は、人間の初期の教育には母親らしい精神、女性らしい愛が不可欠であると説くとともに、幼児教育の施設を「おさなごの花園 Kindergarten」と命名し、保育者の使命を、優れた園丁が、個々の草花の本性にしたがって世話をするように、個々の子どもの天与の素質に恭しく仕えることであると説いた。

◇モンテッソーリ(Maria Montessori, 1870-1952)は、独自の感覚教育法を確立し、幼児教育者の条件として、第一に、ヒューマニズムにねざした無私の愛を持つこと。第二に、神仏に仕える聖職者のように限らない寛容と忍耐と謙遜を持つこと。第三に、感受性を磨き、鋭い観察者であること。

第四に、生きた環境としての、清潔な容姿、もの静かな振舞い、言動の品位。第五に、環境の維持者、管理者であること。をあげ、保育者の役割としては、障害の除去と観察と環境の整備をあげ、消極的な役割ながらも、子どもをひとりの人間として尊重し、信頼して見守ることをあげている。

◇シュタイナー(Rudolf Steiner, 1861-1925)は、モンテッソーリと同じように、人的環境としての教師そのものの人間性と素質を重視したのであった。そのため、教師として採用された先生たちは教職の経験があっても15日間の「人間学」の講義を受けることが義務づけられた。「学校によって、ただひとつの目標は、人間形成である。この目標を達成するための第一の条件は、教員養成の徹底的な改革である。」と高唱したシュタイナーは、ただ単なる教員資格だけでなく、子どもの人間形成に、全身全霊をこめて、その靈魂の深みにまで感応しあえる教師の資質を、人智学の立場から切望している。

◇ランゲフェルト(M. J. Langeveld, 1905-1989)は、その講演集『教育と人間の省察』の中で、「われわれ教育者は、自分たちに委ねられた賜物に他ならぬものとして、子どもの生を自己の全責任において引き受け得るのであり、そしてその時はじめて、この賜物たる子どもたちのために全力をあげて献身し、その全面的開花に奉仕して、やがては彼らを、自分自身の手で人間らしい生の意味を実現していくことのできる成熟した人格たらしめることが、教職にある者の倫理的使命である。教職としての^{クウォリファイド}「資格がある」とは、専門職業のそれと、いま一つは、それとは別種の^{クウォリテイ}「資格」、すなわち、人間および自己自身に関わる行動と思索において、人格的に優れた「質」を保持するという意味での「クウォリティ」である。私は「専門家」というものを、単に形式的な資格条件だけで認めようとは思わない。人格的な意味での高い「質」が是非ともそれに伴わねばならないのである。」と教師の真の資格というものについて述べている。

V. ホリスティックな教師論

ホリスティック(holistic)とは、ギリシア語のホロス(holos)を語源とする、ホーリズム(holism)の形容詞であり、一般に「全体論的」「全人的」「総括的」「包括的」と訳される。このホリスティック教育の潮流のには、ソクラテス、プラトン、ルソー、ペスタロッチー、フレーベル、シュタイナー、ボルノウ、ランゲフェルトなどが位置する。古代ギリシアから現代までの教師論の系譜をホリスティックな教師論に演繹して論究する。

[参考文献]

- 金沢勝夫・下山田裕彦著 『幼児教育の思想』
岡田渥美・和田修二監訳 『ランゲフェルト講演集』
Jean-Jacques Rousseau “Émile ou de l'éducation”